

『なしこまどんの教え』

千葉県松戸市ちばけんまつどしに住む相馬愛美ちゃんそうまなみは、矢切ねぎを育てている農家の娘さん。
毎日、お父さんとお母さんのお手伝いをしています。

「お父さん、お母さん。お参りに行ってくるから、少し待っていてね」

お手伝いをする前に、近くにある神社でお参りすることが愛美ちゃんの日課。軽い足取りで、豊かな景色が広がるあぜ道を歩いています。



「こんにちは、愛美ちゃん。今日も来てくれたんだね」

神社に通っているうちに、巫女さんと仲良しになった愛美ちゃん。

「うん。毎日お願いすれば、神様は私たちを見守っていてくれるから！」

「実はね、この神社には狛犬様がいるんだよ。その狛犬様も、神様と一緒に見守っているかもね」

「えっ！」

愛美ちゃんが目を丸くしていると、巫女さんは微笑みながら「さあ、お参りしてください」と、優しく言いました。

「矢切ねぎが、たくさん採れますように——」

愛美ちゃんは様子を伺うように、じっとお宮の奥を見つめます。

「狛犬様、本当にいるのかなあ」

来た道を振り返り、お家に帰ろうとする愛美ちゃん。すると、突然どこからか声が聞こえてきました。

「こんにちどん！ わっちは、なしこまどん。この神社の守護狛犬だどん！」
ぽかんとした愛美ちゃんを見て、なしこまどんはにっこりと笑ってお話を続けます。

「君の強い思いに惹かれて、会いに来たんだどん。愛美ちゃんのご両親のお手伝いをしているんだけど、作物がたくさん採れるようになるまで、どんなことがあるか知っているかな」

「う、ううん。私、そこまでは知らない」

なしこまどんはううんと頷くと、自信満々にこう言いました。

「それなら、わっちが教えてあげるとん！」

すると、愛美ちゃんは吹雪のような濃い霧に包まれました。驚いて目をつむる愛美ちゃんでしたが、霧が晴れる頃には、なんと可愛らしい妖精になっていました。

◆

「作物を育てることは、大変なことがいっぱいあるんだどん。わっちについてくるとん！」

愛美ちゃんは小さな羽をはたかせて、慌てながらも、なしこまどんについていきます。

「なしこまどん、大変なことってなに？」

愛美ちゃんが聞くと共に、お空が暗くなり、稲妻が走りまわりました。「きゅっ」と悲鳴をあげると、なしこまどんが小さな傘を渡します。間もなくして、大粒の雨が降り始めました。

「例えば、天候だどん。大雨が降ったり大雪が降ったりすることで、作物が育たなくなってしまう。そして、すずめやイタチなどの害獣が、作物を食い荒らしてしまうんだどん。そうになると、もちろん収穫できる数は減ってしまって、農家の方々の負担は大きいんだ」

背後からばさっと大きな音が聞こえると、頭上をすずめが飛んでいきました。すずめは真下にある麦畑に降下すると、種子を突いて食べています。目を凝らすと、イタチが立派になった作物を食べようとして、泥棒のように草むらに潜んでいるのも見えます。

なしこまどんは、悲しい顔をして畑を見つめていました。

「確かに、これはとても大変だね……こうなった時は、どうすればいいのかな」

「実は、JAでは専門業者を通じて、害獣や害虫の防除サービスを設けている場合があるんだ。被害状況のヒアリングや、現地調査が行われるんだ。そして、JAや周りの農家さんで情報提供が行われていることもあるぞん」

「そっか。まずは、相談することが大事なんだね！」

「そう、大切なのは『助け合い』、なんだぞん。わっちが一番伝えたかったことが、君に伝わってよかったぞん——！」

◆

はっと目が覚めると、愛美ちゃんは布団の上でした。

「不思議な夢を見たな」と、考える愛美ちゃん。お手伝いをしようと、お父さんとお母さんの元へ行くと、二人は困ったように頭を抱えていました。

「お父さん、お母さん。どうしたの？」

「最近、害獣達が畑を荒らすんだ。これじゃ、思うように矢切ねぎが育たないよ」

愛美ちゃんは、夢の中でなしこまどんに教えてもらったことを思い出しました。

愛美ちゃんの勧めで、JAに相談したお父さんとお母さん。防除サービスや情報を得て、組合員さんや他の農家さんと力を合わせると、畑を荒らす害獣が見事に減りました。

あれから数か月。今日も、愛美ちゃんは近くの神社にお参りに行きます。

「今日はお願いじゃなくて、ご報告です。矢切ねぎが、たくさん採れました。私に作物を育てる難しさ、助け合いの大切さを教えてくれたからです」

愛美ちゃんがじっとお宮の奥を見つめると、狛犬様がふっと笑ったような気がしました。

「ありがとう、なしこまどん！」